

# 愛読書をもとう

学部長 小 柳 治 宣(教授 社会保障論)

「愛読書は何ですか？」と訊かれて、自信をもって「私の愛読書は〇〇です」と答えられる人が、諸君の中にどのくらいいるだろうか。人生において愛読書をもっているのといないのとでは大きな違いがある。私自身これまでの人生で愛読書の効能を身をもって実感しているので、これは間違いのないことである。

さて、愛読書を得るためには、そもそも本を読む習慣を身に着けなくてはならない。それには「本との出会い」が必要となる。出会いなくして本への「愛」は生まれないからだ。

その出会いの場が、図書館であり本屋なのである。幸いにも神保町周辺には、経済学部の図書館はもとより、法学部図書館、旭屋、三省堂、東京堂、書泉グランデといった日本でも有数の新刊書店が控えている。さらに、古本屋街は昔の面影は薄れつつあるが、最近は裏道にユニークな古本屋もできたりしているので、今もって日本一の古本屋街であることに変わりはない。これほど絶好の環境に恵まれていながら、大学生活で愛読書をもてなかったとしたら、生涯悔いが残ってしまうだろう。

私は学生のころ、時間があると図書館の閲覧室で過ごすか、周辺の古本屋の店の前にある「百円均一」のワゴンを見て回った。そこで出会ったのが、アンドレ・ジイドの『田園交響楽』であり、ゴールズワージーの『林檎の樹』<sup>りんご</sup>であり、中河与一の『天の夕顔』であり、堀辰雄の『風立ちぬ』(いずれも新潮文庫)であった。岡倉天心の『茶の本』(講談社文庫)もそうして出会った一冊である。いずれも百頁前後の薄べらかな文庫本である。だが、私にとってその価値はとてつもなく大きい。特定の季節が来るとこの中のどれかを必ず読みたくなる。それを毎年くり返しているのだ。そのたびに、それらを初めて読んだときのことや、数年前に読んだときのことなどがフラッシュバックのように脳裏を駆けめぐったりする。私にとって愛読書は、過去へ連れ戻してくれる一種のタイムマシンのようなものである。

愛読書に絡んで、本との楽しい付き合い方をもう一つ紹介したい。それは、現在入手困難な幻の本を愛読書にもつことだ。この世に一冊しかない本——というわけにはいかないだろうが、安くて稀少な本は捜せばまだまだ見つかる。文庫本の中にも絶版になって久しい本はいくらでもあるはずである。そんな一冊を手に入れたときの喜びは格別だ。今この本を読んでいるのは、もしかすると、日本で(あるいは世界で)自分一人かもしれない——という思いを抱きながら、本を読んでもみるのも楽しいではないか。

そして、気に入った本には、消しゴムで作ったオリジナル蔵書印を押してみたり、木版画の蔵書票を貼り付けてみると、愛読書も本物になる。そうした愛読書を何冊もつかで人生は大きく変わるはずだ。しかも、様々な本との出会いをゆっくりと楽しめるのは、時間に余裕のある学生時代を描いて他にはない。私がデュマの『モンテクリスト伯爵』(岩波文庫)や、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』(文春文庫)といった長大な物語を胸躍らせながら読破したのも、学生のころのことであった。今ならとても読み切ることはできないかもしれない。最後に、本との出会いがこれまでの価値観や人生観をがらりと変えてしまうこともあるということを付け加えておこう。目からウロコが落ちるということもしばしば起こる。私にとっては、藤井重夫(知っている人はまずいまいが、四十年以上も前に直木賞を

受賞した作家である)の『佳人』と『終わりになき鎮魂歌』がそうである。インターネットなどない当時、絶版となっているこれらの本を手に入れるまでに相当苦勞した。苦勞はしたが、これを読んだときの衝撃は、今でも鮮明に記憶に残っている。私だけの「とっておきの一冊」を諸君も早く見つけて欲しい。